

日本台湾学会 ニュースレター

第17号

2009年10月

<目次>

巻頭言 1

特集 第11回学術大会を振り返って 2

学会・シンポジウム等参加記 9

第16号特集をめぐって 11

日本台湾学会活動報告 15

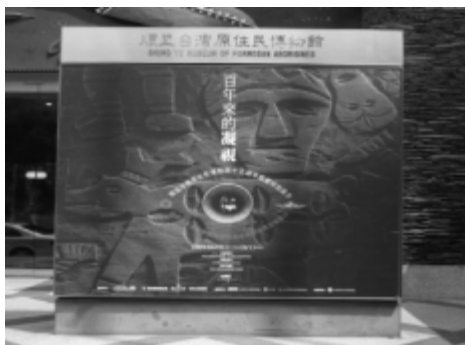
巻頭言

原住民族の民具や工芸品が 日本から暫しの「里帰り」 日本台湾学会副理事長 笠原政治

台北の士林、故宮博物院の斜向いに建つ順益台湾原住民博物館（游浩乙館長）で、今年（2009年）の6月から4か月間にわたって「百年來の凝視」（百年の時を越えて）と題する特別展が開かれた。同博物館の創設15周年を記念する企画であり、公開されたのは大阪の国立民族学博物館（略称「民博」）が収蔵している台湾原住民の民具や工芸品などである。

現在、民博収蔵の台湾関係資料は全部で約5,600点を数え、その中にはとくに原住民族の古い生活用具が多い。それらの大半は日本統治時代に当時の人類学者たちが収集したものである。民博の野林厚志氏を中心に立案された今回の企画では、そのうち選りすぐりの193点が台湾へ搬送され、会場のスペースに合わせて各民族集団の文化特性を際立たせるような展示が行われた。

台湾の民間企業が創設した順益台湾原住民博物



特別展示「百年來の凝視」（順益台湾原住民博物館）

館は、1994年の開館以来、日本の研究者・研究機関との提携を積極的に進めてきた。研究活動に対する助成、およびそれに基づく一連の企画、出版など、いままでにその提携関係はさまざまな実績を挙げてきた。特別展「百年來の凝視」の開催は、そうした開館以来の関係に新しい一頁を加えたことになるだろう。

展示品の大部分は、衣服、楽器、酒杯、運搬具、農具など、かつて原住民族の人びとが使用していた地味な日用品である。それらの品々はもともと学術資料として収集されたと言ってもよい。現地で収集に当たったのは、明治期の鳥居龍蔵、伊能嘉矩、そして昭和期の馬淵東一、鹿野忠雄、瀬川孝吉など、台湾原住民族の研究に大きな足跡を残した日本人たちである。今回の企画では、展示品の紹介と併せて、原住民族の世界に魅せられたそれらの研究者たちについても、収集活動の一端が伝えられるように工夫を凝らした。また、博物館側でも、中文・日文を併載した厚い図録を出版し、日台間にまたがる学術提携の意義を強調した。

特別展「百年來の凝視」を機に、ごく一部ではあるが、日本にある原住民族の民具や工芸品が初

めてまとまった形で台湾へ「里帰り」をした。鳥居の収集品などはおよそ百年ぶりで台湾の地を踏んだことになる。大きな話題にはなりにくい学術ベースの展示でありながら、日台間の文化交流に寄与する催しとして台湾でも好評を博したようである。

付け加えると、今回の展示品を戦前期に収集した主要な人物の一人は人類学者の故馬淵東一であるが、その馬淵の生誕百年を記念する原住民族研究論壇（フォーラム）が、今年（2009年）の8月26日、27日に国立政治大学原住民族研究センター（林修澈センター長）の主催で開かれた。会場は台東の国立台湾史前文化博物館。当日は台湾と日本の研究者（台湾側の多くは原住民族の研究者）がそれぞれ「馬淵東一の学問と台湾原住民族研究」という共通テーマに関連する研究発表を行い、また、28日には台東の池上にある馬淵の墓に一同揃って墓参をした。

特 集

第 11 回学術大会を 振り返って

本号特集は、今年（2009年）6月6日に日本大学文理学部にて開催された日本台湾学会第 11 回学術大会です。

第 11 回学術大会を終えて 日本台湾学会第 11 回学術大会実行委員長 山口 守（日本大学）

昨年の「日本台湾学会設立 10 周年記念学術大会」を受けて、今年の学術大会は新たな 10 年に踏み出す最初の大会だったが、今後の方向性を模索する上で意義深い大会となった。従来の分科会を中心とする学術大会運営のほかに、初めて講演に代わって学会企画シンポジウムが行われたのが今年の特記事項である。台湾学が学際的な研究を展開できる領域としてあるだけでなく、同時に既存の学術パラダイムの再検証を喚起する貴重な実践の場であることを考えれば、今年のシンポジウムは、大会が一日開催のために時間的な制限が多かったとはいえ、意義深い企画であった。

今年は学術大会直前に新型インフルエンザ報道が日本中を駆け巡り、都内で開催予定の一部国際学会が中止されるニュースも流れる中、開催可否を検討せざるを得ない局面も一時あったが、結果的には分科会参加者が 180 名を超える盛況となった。分科会は単に個人研究の持ち寄りでなく、自らの研究方向や方法論を開示して、他者との共時的な共同研究や討論によってそれを発展させていく場であり、学会の水準や成熟度が問われる学術活動としてある。そのためには一回性の発表であるより、事前の準備や事後の検証まで含めた討論の「流れ」が確保されるべきだろう。そうした点から見れば、今年は 2 セッション企画が一つ、1 セッション企画が三つ、自由論題の分科会が五つと、まずテーマを掲げた分科会の少なさに課題が残る大会だった。もちろん個人研究発表の場である自由論題の分科会が確保されていなければならないことは言うまでもないが、それはやはりテーマ企画型の分科会という軸に寄り添った形で展開されるべきだろう。それを可能にするためには、各分野・各地域で行われている個別学術活動をどのように学術大会へ統合していくか、また個別活動を超えて越境・超域的な学術視点をどのように構築するか模索する必要がある。学術大会が新たな発見や出会いの場であることを確保しつつ、同時に継続的な活動の延長として討論の場になるために、今後どのような改善策が求められるかを「次の 10 年」の課題として考えなければならないだろう。その意味でも今年、学会企画として実行されたシンポジウム「台湾原住民族にとっての霧社事件」は、今後の学会の新たな方向性を模索する上で、多くの啓示を与えてくれた。150 人収容できる会場に補助椅子を出さなければならない盛況が、このシンポジウムへの関心の高さを表していた。企画責任者の駒込武氏の趣旨説明文にあるように「歴史的な記憶の“外部”に位置する者が、自らの関心にしがった歴史像を描こうとする構造」を打破しつつ、「立場・手法・視点の違いを尊重し」、「違いを超えた“対話”の可能性を探る」ことを目指した今回のシンポジウムは、過去の検証と未来に向けた対話の重要性を実感させ、個別領域における相違認識や対話の必要性だけでなく、研究や議論の領域化をも超える開放性や流動性が台湾学に求められることを新たに考えさせてくれた。なお日本台湾学会が成熟した学会として発展していくためには、学会員一人一人の学会への関与が不可欠であり、こうしたシンポジウム企画の公募制などを視野に入れてもいい時期に来ているように思う。

最後に学術大会運営に携わった者の経験から言うと、大会開催の具体的手順や方法をマニュアル化しておく、今後開催校を引き受ける時の障害の一つが取り除かれるように思う。長年大会運営に尽力・協力してきた経験者の負担を軽減する上でも、この点の改善が理事会等で検討されることを希望する。(付記：大会当日「報告者論文集」に不足が生じて参加者に迷惑をかけたことをお詫びしたい。購入希望者は学会事務局に連絡頂ければ幸いである。)

学会企画シンポジウム

「台湾原住民族にとっての霧社事件」

駒込 武(京都大学)、垂水千恵(横浜国立大学)

第11回学術大会では、毎回の学術大会で企画されていた記念講演に代えて学会企画シンポジウムを行うという新しい試みがなされた。これは第10回記念大会における超領域的なシンポジウムが好評だったことを受けて、第11回学術大会でも各分野をまたがるテーマのもとにシンポジウムを企画したいという大会実行委員会の希望によるものである。企画立案は大会実行委員シンポジウム担当の駒込武と垂水千恵が中心となり、大会実行委員会および常任理事会と相談しつつ、テーマおよび人選を進めた。

テーマを「原住民族にとっての霧社事件」とした経緯の詳細については『日本台湾学会第11回学術大会報告者論文集』(以下、論文集と記載)所収の駒込による「学会企画シンポジウム趣旨説明文」を参照していただきたいが、「霧社事件が台湾研究の中では例外的に研究蓄積に富む出来事であるにもかかわらず、原住民個々人にとっての霧社事件の意味を考察する作業が等閑に付されてきたのではないか」という思いが出発点となっている。そうした意味で、霧社事件の遺族代表として『清流部落生命史』の編集に参加し、「内側」から霧社事件の歴史叙述の試みを続けてきたTakun Walis氏をパネリストとして迎えることは、本シンポジウム成功の鍵を握る人選であった。幸いTakun氏の快諾を得られ、「台湾原住民族にとっての霧社事件」という論文を寄稿していただけただけでなく、当日は日本語での発表までしていただけたのは望外の喜びであったが、その陰にはTakun氏との長年にわたる信頼関係を築いてきたコメンテーターの下村作次郎氏および、翻訳担当の魚住悦子氏の存在があったことは、特に報告しておきたい。さらに、その縁で当日は『抗日霧社事件の歴史』の著者でもある鄧相揚氏も会場に駆けつけ、日本に

おける霧社事件研究に対するTakun氏の意見を求める一幕もあった。Takun氏の報告は下村氏のコメント「『ガヤ』回復への歩み—霧社事件研究の意味」にも指摘があるように、「ガヤ」破壊という観点から霧社事件を捉えなおすとともに、再び「セデック族」として「ガヤ」が回復していくことへの希望を語ったものであった。それに対して会場の川島真氏からは「どのような社会的状況の中でガヤという『我々』の回復を目指すとする動きが起きてきているのか」といった質問も投げかけられたが、時間的制約もあってその議論を発展することができなかったのは残念であった。

ただ、ある意味で続く二人のパネリスト、呉密察氏、北村嘉恵氏の報告そのものが、「我々」の範囲を巡ってのTakun氏との批判的創造性を秘めた「対話」を提示していたとも言えるであろう。呉氏はKumu Tapas(姑目・荳芭絲)の業績を紹介しつつ、「原住民族の内部の観点」の孕む混沌と多元性に言及、「ポスト民族主義」へのステージへと進みつつある霧社研究の動向を紹介した。さらに北村氏は「台湾原住民族にとっての霧社事件」を問おうとする「わたしたち」の主観そのものをも検討の対象に据えていくような視座を提唱すると同時に、「栄光ある抵抗戦争史の記念すべき金字塔」と霧社事件を捉えた時にこぼれおちていく人々の存在への注目の必要性を訴えた。

その他、コメンテーターの春山明哲氏の報告「霧社事件研究の回顧と展望」および、それに関連する「霧社蕃害事件」映像の放映、現在撮影中の『賽德克巴萊』のプロモーションビデオの放映、さらに『論文集』収録の『清流部落簡史』からの抜粋資料など誠に盛りだくさんの内容であった。十分な議論の時間が確保できなかったことは残念であったが、主催者の予想を越える150名近くの参加者が集まったこと、また非会員の参加者も多数見られたことも含め、日本台湾学会という場で、ディシプリンを越えた共通のテーマについて議論を深めていく手がかりが得られたシンポジウムであったと言えるであろう。(文責：垂水千恵)

第1分科会

「植民地台学生成のメカニズム

—ヴォイス・メディア・帝国大学・植民地都市—

陳培豐(台湾・中央研究院)

本分科会の課題は、植民地台湾の台学生成のメカニズムを究明することである。近代台湾歴史の特異性を考慮して、本分科会はいわゆる植民地統治を戦前日本帝国だけではなく、第二次世界大戦

後の国民党による台湾社会の支配も視野の中に収めている。また文学という定義は書記テキストのほかに、ヴォイステキスト、つまり歌謡曲をも含めている。さらに比較的な意味として台湾のみならず、ハルビンという帝国の北に位置する都市も分析対象としている。時期から見ると、本分科会の報告範囲は1930年代から1970年代まで、地理範囲の面では日本、台湾だけではなく、ハルビンまで広く取り扱っている。

文学の近縁、発展、文壇の形成要因及び因果関係を分析し、台湾近代文学を生成させたそれぞれの変数を探究するのが、本分科会の企画趣旨であるが、学会当日四人の発表者の報告内容を簡単に整理すると次のようになる。

まず、柳書琴は1940年代、台北とハルビンという植民地モダン都市に現れた文芸・言説を取り上げ、帝国の南北に位置する二つの拠点と共に急激な近代化の過程においてローカル知識層を形成し、帝国と相克する言説を生み出す一方、ローカル性に富んだ知識が文芸表出の可能性を含めっていると指摘している。

張文薫は1940年代台北帝国大学の島田謹二、新垣宏一、新田淳、さらに当時文芸界のリーダー西川満の行動、言説を分析し、本来ローカルの知識要素によって支えられた台湾文学がアカデミーの文化参入の下、如何に知的な権力措置に変容し、発展の姿を歪められていったかを解明する。

楊智景は帝国の内部／外縁、ローカル／アカデミーから視点をずらして、日本統治下台湾文学の生成問題を戦時中の中央／地方という枠組みに捉えようとしている。1940年12月、菊池寛を中心に「文藝統後運動」の作家演説団が台湾を訪問した。その際、訪台した内地著名作家たちが台湾を如何に捉え、さらにその後、「文藝統後運動」が如何に彼らの創作活動に投影したかを論じている。

陳培豊は重層的な植民地統治を台湾歴史の特徴として、戦後国民党による台湾支配を「再植民化」と位置づけ、今まで無視されてきた音声テキストに着目して、戦後異なる社会境遇、歴史記憶、言語文化、政治体験を持つ本省人・外省人という二つのエスニックが如何に結び付き、一つの文学解釈共同体として構築されたかを解析している。

戦前、戦後にわたった二回の郷土文学論争を通して、30年代の流行歌が70年代に入って中国 Nationalism、つまり抗日歴史の代替物として「伝統民謡」に変身せざる得なかったプロセスが近代台湾文学の複雑さを語っていると同時に、音声テキストの研究が台湾文学における重要性を示唆している。

台湾文学史上では、論争、運動が多かったのに対して、実践作品は比較的少ない。四人の報告の中に具体的な作品はあまり取り上げられなかったことから、台湾文学の生成過程に文字及び音声テキストが示した意義を再考する必要性を分科会は示したと言えよう。

第2分科会

「台湾文学と文化の越境」 白水紀子（横浜国立大学）

報告1：邱貴芬（中興大学）「可視化/不可視化される原住民族女性：シャマン・ラポガンの創作にみるジェンダー・ポリティクス」

報告2：詹閔旭（成功大学大学院）「白先勇の各時期における『中国翻訳』の策略」

本分科会は、台湾作家が異文化衝突時に生じる文化問題をどのように思考し、それを創作においてどのように表現しているかを探ろうとするもので、邱貴芬報告は漢族と原住民族との間での「文化翻訳」について、また詹閔旭報告は華人グループの新たな「中国想像」について報告を行った。

邱貴芬報告は、台湾原住民族作家シャマン・ラポガンの創作に見られる女性のイメージに注目し、ジェンダー・ポリティクスの視点をういて作品を分析しながら、彼の創作の中になぜ「タオ族女性」が見えないのか、なぜ注目され魅力があるのはみな漢人女性であるのか、これはどのような種族意識とコンプレックスによるのかを論じ、これらの問題がシャマン・ラポガンの描く「タオの男」の限界に関連しているのではないかという問題提起を行った。これに対しコメンテーターの下村作次郎氏（天理大学）は、本報告がシャマン・ラポガン研究を重層的で深まりのあるものし、基本的な論点は同意できると評価したうえで、作品の中には邱貴芬氏の主張とは必ずしも一致しないタオ族女性も登場することを具体的に指摘して、さらなる作品分析の必要を述べた。

詹閔旭報告は、ディアスポラ華人がいかに「中国を翻訳」してきたかを、白先勇が度々書き換えを行った中国伝統戯曲「牡丹亭」を通して論じ、「華語語系文化」社会に生じた変化を背景に、白先勇がこれまでの中国へのノスタルジーとは異なる新たな「想像としての中国」を生み出していることを論じた。これに対してコメンテーターの三木直大氏（広島大学）は、詹閔旭氏が使用する「華語語系文化」について、概念規定が不十分で

ありその範囲が明確でないことを指摘し、これに収まりきれない様々な事例があることを挙げながら、その有効性に疑問を投げかけた。しかしながらこうした新たな視点を使つての意欲的な試みは高く評価されるべきとして今後の研究の深化を期待した。

以上のように、2報告は作家・作品研究に新しい視点を導入しようとする意欲的な報告であり、それが個別作家研究に留まらず、作家たちがどのように新たな社会的リアリティを描写し、歴史を捉えなおし、新たな社会的想像を生み出しているかなど、作家の文化受容感覚の構造に関わる興味ある報告であった。

第3分科会

「台湾でく作家」を目指すということ —日本統治期・国民党戒厳令期の二つの『抑圧』下における青年たちの欲望」 赤松美和子（横浜国立大学）、和泉 司（慶應義塾大学）

第3分科会では、日本近代文学研究者の紅野謙介先生をコメンテーターに迎え、和泉司「文学懸賞を目指す植民地の〈作家〉志望者—日本帝国の〈文壇〉を巡って」、赤松美和子「戒厳令期における〈作家〉を志望する青年たち—二大新聞の文学賞を中心に」の二つの報告が行われた。

これまで日本における台湾文学研究は、日本植民地期の日本語文学、戦後の中国語文学というように個別に行われてきた。本企画では、今後、1945年を超える文学研究を展開していくための第一歩として、〈作家〉志望の門戸の一つとみなされている文学懸賞の分析を通して、日本植民地期と国民党統治期の二つの時代における文学場のシステムの機能を考察した。

和泉報告は、1930年代に日本の〈中央文壇〉に登場した大規模な文学懸賞に誘惑され投稿し、一度は採用されながらも挫折していく、植民地の作家たちの日本〈中央文壇〉志向とその不可能性を、楊逵、呂赫若、張文環、翁鬧、西川満、龍瑛宗を例に丁寧に論証し、文学運動の帰結の一端を示した。赤松報告は、1970年代中葉に現れた『聯合報』と『中国時報』の二大新聞の副刊の文学賞が、戒厳令期の国策文学から戒厳令解除後の国民文学への移行に大きな役割を果たしたことについて指摘した。

本企画にとって、企画のきっかけとなった『投機としての文学—活字・懸賞・メディア』（新曜社）の著者である紅野先生にコメンテーターをお引き

受けいただけたことは幸運であった。紅野先生からは、和泉報告に対して、後に雑誌『改造』を創刊する山本実彦が巻き込まれた「台湾事件」と台湾総督府の軋轢が在台作家たちへ与えた影響と、明治期後期に登場した文学懸賞と、植民地出身者たちが投稿を始めた昭和初期のそれとの連続性と不連続性の問題についてご指摘をいただいた。赤松報告に対しては、文学賞の規範としての効用、文学賞の権威化と相対化の過程の分析の必要性など大変貴重なご指摘をいただいた。また、フロアより、西川満の受容の問題、〈作家〉の定義の問題、また郷土文学論争と二大新聞の文学賞との関係など有益な議題を頂戴した。

この分科会により、それぞれの時代の文学のシステムが相対化され、多少なりともそれぞれの時代の〈作家〉を目指すことの可能性と不可能性を前景化できたと思う。また、二つの時代の文学システムの比較に止まらず、日本統治期の作家の戒厳令期の活動への目配りなど1945年を超える研究の様々な課題が提出された。

本分科会での議論を踏まえ、報告内容を再検討し、その成果をまとめていきたい。

（文責：赤松美和子）

第4分科会

「台湾・韓国産業発展比較」 佐藤幸人（アジア経済研究所）

はじめに企画の主旨を提示しておきたい。台湾と韓国は1980年代半ばまで、工業化を主軸として急速な経済発展を遂げてきた。その過程と背後にあるメカニズムの共通点と相違点およびに関しては、既に一定の研究が蓄積されている。

両国の経済発展は1980年代半ば以降、新たな段階に入ったが、この段階の比較研究は今のところ不十分である。特にTFT-LCDとDRAMという高度に資本集約的な産業の発展は、台湾製造業の従前の発展メカニズムから逸脱した部分があるとともに、韓国との共通性が認められる。この点について研究を深める必要があると考え、分科会を組織した。

分科会ではふたつの報告がおこなわれた。ひとつは赤羽淳会員（三菱総合研究所）の「台湾TFT-LCD産業の発展過程における資金調達—友達光電の事例を通じて」、もうひとつはゲストの吉岡英美准教授（熊本大学）の「韓国半導体産業の『財閥』的発展過程—サムスン電子の事例」であった。

赤羽会員は、台湾のTFT-LCD産業の発展について、これまで多面的に研究を重ねてきた。今回の報告では、特に資金調達に焦点を当てて、トップ

メーカーの友達光電の事例を分析した。友達光電が政策および金融システムという外部環境の変化を巧みに利用することによって、親会社の保証による銀行借入れから内外の株式市場からの調達へと調達先を多様化しながら、調達額の拡大を進めてきたことを示した。

吉岡准教授はこれまで、韓国の DRAM 産業、特にサムスン電子の発展について、緻密な研究をおこなってきた。今回の報告では、以前のサムスン電子は外部資金に依存していたが、技術面、生産能力面での優位が確立されるとともに収益力が向上し、内部資金によって成長をまかなえるようになっていたことを明らかにした。

コメンテーターには日本経済新聞社の山田周平氏をお招きした。山田氏は昨年まで3年間、台北に支局長として駐在し、ハイテク産業の取材も精力的におこなっていた。山田氏は赤羽報告に対して、台湾 TFT-LCD 産業の発展において「カネが回るメカニズム」が重要であったことを強調した。また、メカニズムの一環として専業メーカーのメリットを、日本の総合電機電子メーカーと対比しながら指摘した。

もうひとりのコメンテーターは佐藤がつとめた。佐藤は赤羽会員に対して、吉岡報告を踏まえながら、台湾企業の意志決定のメカニズムおよびそれがもたらすダイナミズムの分析を進めてほしいと注文をつけた。

フロアの参加者は10名ほどだった。フロアからは、何故、日本は TFT-LCD や DRAM で敗れたのか、政府の役割をどう評価するかなど、コメントおよび質問が出された。山田氏は第1のコメントに対する応答として、TFT-LCD 産業においては需給の予測が経常的に外れていく中でどのように行動するかが重要であり、予想を外れた事態に迅速に対応するためには日本企業のような長期的な視点は持たずに、台湾企業のように無限に修正を繰り返した方がいいかもしれないと指摘した。また吉岡准教授は、サムスン電子において半導体産業に対する信念という点では、オーナー経営者も俸給経営者も一貫していること、その点から博打ではなく、必要性を認めて巨額の投資をおこなったと説明した。赤羽会員も山田氏同様、日本の総合電機電子メーカーの意志決定における欠陥を指摘した。なお、TFT-LCD 産業の発展においてカネは必要条件だが十分条件とはなり得ず、川下産業の発展など他の条件も重要であったとし、自身の研究全体における今回の報告の位置づけを確認した。

僅か2時間の議論では明瞭な結論に至ることはそもそも期待できないが、報告者をはじめ参加者

の今後の研究の刺激となる場とはなったのではないかと思う。

第5分科会

「自由論題報告Ⅰ」

三尾裕子（東京外国語大学）

陳黎明「台湾人の日本観光と旅行代理店の商品生産についての人類学的考察」

本報告では、台湾人による日本への観光活動を取り上げ、従来の観光人類学が取り上げる観光とは逆方向の、旧植民地から旧宗主国への観光を考察しようとした試みである。日本統治期における台湾の人々の日本観光から、戦後の国民党統治期以降民主化を経て現在に至るまでの台湾の政府の対日本文化政策などを背景としながら、本報告では、特にこれまであまり取り上げられることがなかった台湾の旅行代理店の旅行商品の開発過程、マーケティングを分析し、また旅行者自身がどのように日本観光を選択しているのかをインタビューによって明らかにしている。その結果、現在の台湾人旅行者は、テレビや雑誌などの情報、オピニオンリーダーの意見、インターネット上に掲載された個人の旅行体験談など、事前に大量の情報を収集しており、それに基づいて、旅行方法を選択するために旅行代理店の商品を選んでいるという傾向が見られる、と分析している。

コメンテーターの上水流久彦氏からは、1. 現代の台湾人が日本を特に観光の行き先を選ぶことについて、他地域との相違があるのか、2. 植民地時代の日本観光のあり方が取り上げられているが、それと戦後の日本観光との関連性について、3. 世代による日本に対する情報の量、質、集め方の相違、4. 事前に手に入れた情報と現地での体験との相違、また日本に観光に行ったことによって体験したことがリアリティのある日本文化として感じられているのかどうか、といったことへの質問及び調査の必要性の指摘があった。

田上智宜「新移民の出現と台湾族群論の再編」

本報告では、昨今急増する東南アジアや中国大陸などからの婚姻移民や外国人労働者に対する研究を、台湾「族群」論研究の視点から考察することを目的とした。戦後の台湾において支配的であった国民統合のイデオロギーとしての一元的な中華民族論に代わって、1990年代以降、新たな国民統合原理として「四大族群」論による多文化主義が登場した。その後、2000年代に入ると、婚姻移民や外国人労働者が急増することとなった。特に、

婚姻移民は、台湾において子孫を産み育てていく存在でもあるため、こうした人びとを「第五の族群」として国民統合していく議論が、盛り上がっている。発表者は、こうした議論に対して、「族群」概念を再検討する中から、新移民女性やその子供たち（新台湾の子）を従来の族群概念で捉える事は有効ではないと指摘した。その問題の核心は、台湾の住民を「四大族群」に区分することにより、逆にその分類が周縁的な人々の存在や、人びとのアイデンティティの多元性、重層性を隠蔽することにあることを指摘した。

コメンテータの五十嵐真子氏からは、1. 様々な範疇の人々が含まれる新移民のうち、第五の族群に相当する人々の範疇がどのような人々かについて、2. 「族群」概念が使われるようになった文脈と、第五の族群の含意との関係について、3. 政治的な概念でもある族群概念を、エスニックな文脈で新移民に当てはめることの妥当性について、コメントと質問があった。

このほか本分科会では、どちらの発表にもフロアから質問やコメントがよせられ、活発な議論がなされた。

第6分科会

「自由論題報告Ⅱ」

岡崎郁子（吉備国際大学）

1. 許菁娟「1980年代初期における台湾郷土文学の発展—黄春明の作品の映画化現象からの考察」

1980年代初め黄春明の作品が何本か映画化され、黄春明ブームが台湾で起こった。報告者はその原因を、1970年代末の他の郷土作家との比較等を通じて、国民党政府の意向が暗に働いていた点に焦点を当てて論じた。菅原慶乃氏のコメント：「国民党政府の三十年代文学に対する見解の変化が、リアリズムへの対処の変化をもたらしたとの報告だが、そこにも取舍選択があったと思うし、黄ならでは台湾ニューウエーヴとの人的繋がりという意味合いも大きいように感じる。上映本数が僅かに止まったのは、その登場の重要性に反し、後に商業主義路線に吸収されてしまったことで、当初の影響力も長続きしなかったということではないか」というもので、報告者は数は僅かであっても、その評価を通じて文学や社会に影響を与えたと回答した。会場からは、「ブラックユーモアを内包し、巧さをもったリアリズムが、政府にとって本当に無害だったのか」との質問があり、報告者は「黄には政府を批判する意図がなく、人生に対して絶望感を与えないといった点で国民党政

府が無害と解釈していたと考えられる」と回答したが、今後議論の余地がある。

2. 倉本知明「国『本』合作としての戦後台湾—邱永漢『長すぎた戦争』における老兵表象を中心に」

戦後の日本で日本人読者を対象に書かれた邱永漢作品を、台湾の1950年代の反共文学、もしくは1970～80年代の老兵文学と比較した上で、如何に現代台湾文学に位置づけられるかを論じた。戦後国民国家建設を目指した政府が、日本統治の再帰性を望み、「白団」と称された旧日本軍将校団まで招聘した事実を明らかにし、邱はこの作品によって、結果として国民政府が内包する矛盾と近代化を描くことになったと結論づけた。丸川哲史氏のコメント：「1950年代に読むより現在の我々が読んだほうがよりわかるという面白さが『長すぎた戦争』にはあり、研究対象として興味深い。ただし、冷戦の続く戦後東アジアの政治地図を、水面下での状態も含め正確に書いたほうがよい。また1930年代国民党は徴兵制を実施しようとして失敗したが共産党軍はなぜ成功したのか、その国民党が台湾に来てからは、台湾人を如何に再教育し国民化していくかという過程等を今後さらに検討するとよいのではないか」。座長からは「結果として反共文学、老兵文学のどちらにも位置づけがなされていない。邱の作品が台湾で発禁になった事実はない」点を指摘した。会場からは、外省人と本省人に横たわる言葉の問題を邱が描いていない点や、徴兵制・動員を語るとき、アメリカの存在は欠かせない等の指摘があり、その後活発な議論となった。

第7分科会

「自由論題報告Ⅲ」

星宏修（琉球大学）

本分科会の報告は、どちらも植民地期の台湾人文学者を対象としたものであった。

まず謝惠貞氏（東京大学院）の報告「『フォルモサ』同人から出発した巫永福の異質性—横光利一経由の意識の流れの受容をめぐる—」は、同じ『フォルモサ』で活動しながらも張文環や吳坤煌と異なり、反抗精神が見られないことから「異質」の存在だと評されてきた巫永福の文学作品を、彼が師事した横光利一の影響関係を論じつつ再評価を試みたものである。

謝氏は、巫永福の文学の基本的なスタンスは、同胞の多数を占める下層階級に関心を向けたもの

であり、横光利一経由で「心理法則の認識」に基づく「意識の流れ」を受容したという。さらに巫永福の小説『眠い春杏』に描かれた「眠気」は、下層階級の描写の系譜に繋がるものであると同時に、意識の流れという横光の方法を取り込んだ作品であると論じた。

コメンテーターを担当した広島大学の川口隆行氏は、巫の再評価を目指した報告としてのあり方を評価しつつも、より具体的な作品分析の必要性を指摘した。また、酒井直樹の仕事に言及しつつ、報告者自身の研究者としてのポジションについて問いかけがなされた。

これに続く嶋田聡氏（愛知大学院）が行った「黄得時試論—植民地期台湾における『地方文化』概念の確立に至る道—」という報告は、「漢式伝統」の文人として認識されている黄得時が、1940年代の「新体制」期に、どのような思想的立場から近代的な文化建設などの課題に取り組んでいたのかを問い直そうとするものであった。

嶋田氏は、初期の文芸評論と彼の「本土エリート」という立場を紹介したうえで、黄得時の2篇の詩を通じて、作者の「時間感覚」を読み取ろうとする。氏によれば、それは「加速する」時間、つまり「近代」という時代に対する黄の認識と結びついていたのだという。

嶋田氏の報告に対しては、一橋大学院の橋本恭子氏がコメンテーターを担当した。橋本氏は、論の展開の矛盾や飛躍を丁寧に指摘しつつ、論文タイトルの「地方文化」という概念が明確にされておらず、黄得時の説く「近代文化」の建設とは「地方文化」の建設を意味したのか、と疑問を投げかけた。

限られた時間のなかで可能な限り実のある質疑応答を行うため、この分科会では報告者とコメンテーターにレジュメを作成してもらった。学会当日に『報告者論文集』を受け取った参加者にとっても、報告の内容を理解しやすかったのではないかなと思う。

第8分科会

「自由論題報告Ⅳ」 松田京子（南山大学）

第8分科会では、自由論題報告Ⅳとして、2つの報告が行われた。まず、下岡友加氏（県立広島大学）は「雑誌『台湾愛国婦人』の基本的性格」というテーマで、1908年から1916年まで全88巻刊行された『台湾愛国婦人』について、その基本的性格を①愛国婦人会台湾支部の機関誌としての

役割、②文芸総合雑誌としての側面、③在台日本人の文芸作品掲載の場の3点だとし、それぞれの内容について詳細な報告を行った。それに対して、コメンテーターの洪郁如氏（一橋大学）より、在台日本人の文学活動の開始期を具体的に論じた点など本報告の研究史上の意義が指摘された一方で、植民地史における『台湾愛国婦人』の位置付けが不十分であり、その点で、今回の報告では触れられなかった雑誌の漢文欄の分析も必要不可欠だったのではないかなという疑問が呈された。

次に、紀旭峰氏（早稲田大学大学院）は「安部磯雄と近代台湾—大正期と昭和期の台湾訪問を手がかりに—」というタイトルの下に、キリスト教社会主義者の安部磯雄の台湾認識を論じた。報告者は、特に、1917年と1935年に行われた安部の台湾訪問に注目し、安部の台湾での活動と訪問直後に発表された発言から、安部の関心は、台湾の養女制度、教育問題、自治制度、選挙問題、内台融合問題など幅広いものであり、さらに安部は一貫して人種・階級という枠組みを超えた視点に立っていたと結論づけた。これに対して、コメンテーターの梅森直之氏（早稲田大学）より、本報告が提示した論点のうち、初期社会主義者の「知の交流」の具体的なあり方や、「民族」をめぐる明らかになる立場性という問題は、さらに考察を深化させるべき興味深い論点であるという指摘がなされた。またフロアからは、「知の交流」を論じる際、台湾知識人の側からの働きかけについても考慮する必要性が指摘された。

第9分科会

「自由論題報告Ⅴ」 松田康博（東京大学）

第1報告、井上正也（神戸大学）「佐藤政権の対台湾政策—『反共外交』と『経済開発』の葛藤、1964-1974年—」の概要は、以下の通りである。佐藤政権の対台湾政策は、従来対中国政策の裏面史として取り上げられてきたが、本報告は対台湾政策の内在的論理、特に政府内の対立を明らかにした。1965年に開始された台湾向け円借款は、米援打ち切りの肩代わりとしての役割だけではなく、台湾の経済発展により台湾を「王道楽土」にするのだという主張が外務省アジア局で見られた。外務省は遅かれ早かれ日華断交は間違いのないため、日台関係悪化時の安全弁として円借款を重要視していたのである。

前田直樹会員（広島大学）から出されたコメントの概要は以下の通りである。佐藤政権の対台湾

政策を日米台中の資料を駆使して重層的に分析した論文である。佐藤政権の命題は、事実上「2つの中国」という現実の下、いかにして台湾を確保するかであった。当時親台湾派国會議員が反共で、外務省が経済重視であり、それぞれ日華・日台関係を代表する分かりやすい構造であった。木村四郎七駐華大使の提案は米国の対台湾認識と似ているが、日本の方がはるかに具体的であった。ただし木村の台湾化促進策が、将来の台湾確保を目指したものとまで言い切れるかは疑問である。

第2報告、坪田中西美貴「統治の浸透性の不均衡さがもたらすもの—台湾先住民の植民統治経験から—」の概要は、以下の通りである。日本の台湾統治において、統治の浸透性を、特に服装の選択に注目して明らかにした論文である。従来服装の選択は統治者側の統治権力とは、無関係に選択されていたとされ、たとえば女性が社会的な階層上昇を目指したために、和服が選択される例が多かった。ただし、和服選択の女性が多い地域は、おおむね権力の浸透性が高かったと証明できる。男性に関しては、和服や台湾服はほとんど選択されず、新たに付け加えられたイベントの際に洋装が選択されていた。

笠原政治会員（国立民族学博物館）から出されたコメントの概要は以下の通りである。衣服や食物は、興味深いものの記録に残らない難しいテーマである。本論を進めるにあたり、当時の物流がどうなっていたか、つまり被調査地域に一樣な選択肢があったかを確認する必要がある。当時、先住民は交易所や商店でしか買い物ができない。和服をどこから入手したかを明らかにする必要があるし、入手可能性がなければ「欲しいけど買えない」場合もある。また、統治側が日本語教育ではなく、むしろ交通が普及していたほうが日本語は普及するという傾向もあった。衣服の選択と権力の浸透をどう結びつけるかは今後さらに探求が必要な課題である。

参加者は35名に上り、活発な議論が展開された。

学会・シンポジウム等参加記

天理台湾学会第19回研究大会報告 野間信幸（東洋大学）

本年度の天理台湾学会は、天理大学を会場に、7月4日（土）に開催された。

当学会はほぼ毎年この時期に開催されるが、このころの天理は青垣が映え、木々の香りが漂って、季節柄「大和うるはし」の様相をみせる。天理はけっして住みたい場所ではないが、年に一度訪れるにはまことに魅力的な雰囲気をもった町である。同様の思いをもつ人がいるせいか、日本台湾学会で会えない研究者と、天理台湾学会でお目にかかることがよくある。当学会には独特な磁場があるのであろう。

第19回研究大会は、午前の部が2分科会に分れて、各3名ずつの発表があった。午後の部も2分科会に分れ、各2名と3名の発表があった（研究発表者は全11名）。最後に「特別研究報告」として、台湾からわざわざこのために参加された南天書局の創業者、魏徳文氏が講演された。以下に、発表者と題目をあげる。

○午前の部（第1会議室）

- ・金想容（大阪大学言語文化研究科）「現代台湾における『日本発歩ピュラー文化』の再構築—台湾『偶像劇』の考察を中心に」
- ・許容敏（中国文化大学日本語文学系）「台湾における『尼特（ニート）族』の諸問題」
- ・葉憲峻（国立台中教育大学通識教育中心）「第2次世界大戦前後の台湾における『日本皇民化』及び『中国化』教育（1941～1949）—初等教育の比較」

○午前の部（第2会議室）

- ・林盈萱（大阪大学言語文化研究科）「台湾人日本語学習者に対する学習ストラテジートレーニング—教育デザインによる影響と学習ストラテジー調整における個人差に注目して」
- ・横路啓子（輔仁大学日本語文学科）「日本プロレタリア文学の台湾へのルート—『台湾日日新報』（1926～1935）を例に」
- ・高坂嘉玲（真理大学語文学部台湾文学学科）「『亡妻記』の表と裏—『吳新栄日記全集』より論ずる」

○午後の部（第1会議室）

- ・張家麟（真理大学宗教学科）「宗教儀礼シンクレティズムと宗教発展—台湾における民間信仰の儀礼進化の例より」
- ・磯田一雄（大阪経済法科大学）「皇民化台湾の日本語短詩文藝と戦後の再生—台湾的アイデンティティの表現を中心に」

○午後の部（第2会議室）

- ・羅濟立（東呉大学日本語文学科）「『警友』における台湾客家語の四県音と海陸音—統治後期植民地警察による客家語音韻認識の一側面」

- ・洪惟仁（国立台中教育大学台湾語文学系）「台湾の言語地理学はどこまで進んだか」
- ・張桂娥（致理技術学院）「台湾におけるエンターテインメント読書の可能性—日本児童文学のエンターテインメント観の変遷からみる講談社『青い鳥文庫』の翻訳受容」

○特別研究報告

- ・魏徳文（南天書局）「画像と文学—日本統治期台湾に関連する地図と写真」

今回の研究大会の特徴のひとつとして、発表者のほぼ全員が台湾から参加していることがあげられる。唯一の例外となった磯田氏の発表でも、台湾から来られた張良澤氏が司会を担当しているので、すべての研究発表で、日本と台湾の研究者のユニットが形成されていたことになる。当学会の国際性が、よく表れた構成になったと思う。

また今回から発表時間が延長され、一報告 35 分間を確保できることになった。この措置によって、発表後の質疑応答に費やす時間にいくぶんゆとりが生じたので、会場でのやりとりが豊かになり、議論もそれだけ深まることになった。

一例をあげれば、台湾から参加された横路啓子氏（輔仁大学助理教授）の研究発表は、私が司会を担当させていただいた。発表内容は、1926 年から 35 年にいたる『台湾日日新報』「文芸欄」の検討をとおして、台湾に左翼思想やプロレタリア文学が移入されるルートを指摘した興味深いものであった。氏の発表はよく評価されるものであったが、それでも質疑応答では、資料面での不足を補う指摘から、レジュメの表記面での不備に至るまで、発表主旨に沿った有用な発言が続いた。字数の制限上拝聴した研究発表のすべてを報告するゆとりはないが、このような雰囲気包まれて、全体的に充実した発表が行われた。

さて、今次の研究大会では、魏徳文氏の特別研究報告「画像と文学—日本統治期台湾に関連する地図と写真」に、賛沢な思いをさせてもらった。なにが「賛沢」なのかというと、この講演で採り上げられた佐藤春夫「殖民地の旅」を、魏徳文氏の語りに導かれつつ、当時の地図や写真、絵葉書、そして音声付の映像をつぎつぎと目にしながら 90 年前にタイムスリップし、会場にいながらにして追体験できたのである。「特別研究」の名にふさわしい、感動をおぼえる講演であった。

なお、次回の第 20 回研究大会は、記念大会として 2010 年 9 月 11 日（土）12 日（日）に、場所を台湾に移して開催の予定である。

「台湾殖民地史学術検討会」参加記 阿部賢介（台湾・国立政治大学大学院）

2009 年 8 月 20 日—25 日にかけて、大連泰達美居ホテルにて、中国社会科学院台湾史研究センター主催による、「台湾殖民地史学術検討会」が開催された。会議には台湾から許雪姬中央研究院台湾史研究所長、黃富三同研究員、卓遵宏国史館主任秘書等約 30 名が、中国からは歩平中国社会科学院近代史研究所長、王鍵同院台湾史研究センター秘書長、劉国深アモイ大学台湾研究院院長等約 50 名が、そして日本からは春山明哲日本台湾学会理事長、若林正文東京大学教授、檜山幸夫中京大学法学部長等約 15 名が参加し、総勢 100 名近くの参加者で、盛大な会議であった。会議の日程は、前後の移動日を除くと、最初の 2 日間で報告発表を行い、後の 2 日間は旅順・大連の市内見学を行った。

報告発表の内容は主に、日本統治時代の台湾における統治政策、制度、経済、教育、技術等、若干文学、文化の領域関係の分野が少なかったものの、多くの分野での報告が行われた。分科会の形式を取ったが、参加者が多く各報告の時間が多く取れなかった事、またコメンテーターが複数の報告に対して、1 人のみであったので、十分議論を行うきっかけがとれなかった事が、残念であった。しかし、今回の会議で、台湾殖民地史を行う台、中、日研究者間の交流が行われた事は勿論、各国間での研究の特色が認識出来た事は、大変有意義であった。例えば台湾では、既に蓄積された台湾史研究を背景に、明確な研究対象について、深く掘り下げているが、中国での実証的な台湾史研究は、個別的に掘り下げている報告も見受けられたものの、全体的には未だ概論的に日本植民地時期を述べる程度に留まっている感が否めなかった。また日本側からの統治政策についての分析は、日本人研究者が、詳細な報告を行った。従い、閉会式に許雪姬所長がコメントしたように、各国間で研究成果を頻繁に参考し合う事が重要だと感じた。また、租借地ながらも台湾同様、日本統治下であった大連との比較研究は、研究自体も殖民地史として重要なテーマであるが、台中日の共同研究テーマとしても相応しく、大いに発展の余地があると感じた。

報告発表終了後、1 日目は旅順にて、日露戦争の激戦地 203 高地や、大谷探検隊が発掘したミイラ等が収蔵されている旅順博物館、安重根が処刑された旅順刑務所を視察した。2 日目は、大連市内にて、旧満鉄本社や、旧大和ホテルを始めとする日本統治時代の建物が四方に残っている旧大広場（現中山広場）、当時は満州への海路の玄関口と

して栄えた大連港、及び幾つかの海岸公演を見学した。大連は、戦前中国の領土ながらロシア・日本の統治を受け、戦後は再びソ連の占領、そして国共内戦の場となった場所で、台湾と同じように、近代以降外来の支配を受けた歴史があり、様々な角度から、台湾との比較研究が可能だと、この見学からも感じる事が出来た。

今回は光栄にも、このような会議に参加出来、多くの研究者と交流出来た事は、非常に有意義であった。現地では中国社会科学院を始め、日本台湾学会からの参加者の方々にも、非常に御世話になった。この場を借りて、改めて御礼申し上げます。

第 16 号特集をめぐって

『日本台湾学会ニュースレター』 第 16 号「特集」讀 下村作次郎（天理大学）

『日本台湾学会ニュースレター』は第 16 号より編集者が交替した。前任の松金公正さんは『日本台湾学会報』の編集に移られた。今度は本体の学会報でその手腕を発揮されることになるわけだが、やはり大変な仕事で、黙々と学会に貢献される松金さんには頭が下がる思いだ。

松金さんから引き継がれたニュースレターは新しい編集者、前田直樹さんを迎えて活気づいている。第 11 回学術大会前夜、26 頁もあるニュースレターが送られてきた。内容を見ると、なんと特集を組んでいるではないか。やるねえ前田さん。早速、理事長の巻頭言に目を通し、ぱらぱらとめくって、呉豪人さんの文章が目にとまり、そして引き込まれた。呉さんはすごい文章を書く人だ、呉勲人さんのことを「兄はある種、語学の天才で……」と言っていたが、呉さんの一見、よたったふぜいの文章もなかなか味わい深く、ニュースレターの誌面に重みを加えている。

そんな感想を持っていたので、学術大会の懇親会で前田さんと言葉を交わした際に、ニュースレターへの賛辞と呉さんの文章の読後感を語ってしまった。その結果、いま有難くも旅先で「特集」への感想を書く羽目に陥っている。

前書きが長くなってしまった。以下、「特集」の中で興味を持った随筆について書いてみる。

西成彦「台湾の文学と多言語—比較文学研究者の視点」は、もともと「ポーランド文学の研究を始めるために比較文学の門をくぐった」という氏の台湾文学観が語られていて大変興味深い。氏は比較文学の大御所島田謹二の『華麗島文学志』に「『外地＝植民地』という空間における言語接触・言語隣接に対する感性の鈍さ」を見ると言う。このような表現で島田謹二の台湾文学観について指摘したのは私ははじめて見たので、新鮮な印象を受けた。さらに氏は、比較文学の観点から、佐藤春夫の『女誠扇綺譚』とエドガー・アラン・ポーの『アッシャー家の崩壊』の比較や、「外地文学」を読み解く方法としてカミュの『異邦人』からの視点の可能性を指摘する。筆者は 1980 年に台湾の大学で日本語を教えるようになり、台湾文学を読みはじめたが、その時、学生時代の愛読書であったカミュの『異邦人』やカフカの『変身』のことを考え、日本植民地時代に台湾人作家が日本語で書いた小説をどのように読んだらいいのかを、当時はまだ健在だった多くの台湾人作家を訪ね歩きながら必死に考えていた。氏の文章を読んで、その頃のことを思い出された。埴谷雄高の『死霊』の「自自律の不快」は、作家の台湾での植民地体験（日本人であることの不快）なしには理解できないことや、名作『虚空』の舞台は陽明山の宿舎から毎日見ている沙帽山（毒蛇の山）であることを知ったのもその頃のことである。台湾は日本近代文学と実に深い関係がある。

話を戻すと、西氏はまた「作家一人一人がさまざまな言語の隣接状況をくぐりぬけて、北京語作家になる」と述べる。台湾文学の特色と作家たちが置かれた言語状況および創作の現場をこれほどの確に語った言葉はない。氏は随筆の最後に台湾原住民文学について触れておられるが、近代に入って台湾で生まれた文学はみな、氏が述べるように「作家一人一人がさまざまな言語の隣接状況をくぐりぬけて」生まれた文学であると言っても過言ではない。かつては「日本語作家」になり、いまは「北京語作家になる」のだ。同時に今日の台湾では、台湾語文学が確立され、さらに客家語文学や原住民族各族の族語文学の創出への挑戦が行われている。

野崎歓「台湾映画の『フランス映画化』をめぐって—フランス文学研究者の視点」は、世界の映画界における台湾ニューウェイヴの監督たちへの高い評価を伝えている。野崎氏は冒頭に「楊徳昌と侯孝賢。台湾映画という枠を超えて、20 世紀後半の世界の映画で、もっとも素晴らしい監督たちだと思う。ぼくにとっては、東アジアに対して目を開かせてくれた恩人でもある」という。氏は

随筆の中で、この二人と蔡明亮が現在もフランス映画界で高い評価を受けている理由について述べている。それは「ヌーヴェルヴァーグの監督たち」の撮影手法・姿勢を「台湾ニューウェイヴは見事なまでに共有し、尖鋭化している」と。そして最後に、こうしたフランス映画の影響や監督の個性以外に「(台湾映画の魅力は) 現代台湾社会のあり様と緊密に結びついた表現であるに違いない」として、台湾研究者に「フランス映画批評経由ではなく、台湾文化研究の英知に照らして解明する余地は大いにあるはずだ」との注文をつけることを忘れない。

ふたりの監督の作品は大体観ているつもりでいたが、まだ観ていない作品が多くあることを知った。すべてDVDになっていると思うのでこれを機に全部観てみたい。

飯塚容「台湾同時代演劇への関心—中国演劇研究者から」は素晴らしい。筆者は、1930年代の中国演劇に少し関心がある。台湾の詩人吳坤煌は20年代後半から30年代にかけて秋田雨雀や村山知義らに師事し(師事は言い過ぎかもしれないが)、中国人や植民地下の朝鮮人の左翼系演劇関係者と深い交流を持っていた。そうした関係から吳坤煌は、当時「半島の舞姫」と称された崔承喜の台湾公演を実現させた。筆者の調査によれば、崔承喜は3回台湾に来ている。第1回目は、師・石井漠の台湾公演の一員として訪台した。石井漠は朝鮮だけでなく戦前の台湾の舞踊界にも大きな影響を与えた人だ。飯塚氏があげる「クラウドゲイト舞踊団」(雲門舞集)の林懷民は、現代舞踊で世界的に著名だが、戦前から戦後にかけての台湾では石井漠の愛弟子たちが活躍していた。

筆者の台湾における現代演劇体験は、1982年に台北市内で上演された白先勇の「遊園驚夢」である。戒嚴令下の暗い台湾社会で『台湾文芸』や『現代文学』、そして党外雑誌に民主化の息吹を感じていた筆者には、この演劇は印象深く、台湾の演劇に秘かな魅力を感じたのを覚えている。80年代初年は、他に映画では鍾理和の「原郷人」が上映され、また、音楽では侯德健の「龍の伝人」が出てきて台湾の現代音楽のターニングポイントとなった。台湾の現代文化は、その萌芽がすでに70年代あるいはさらに古く60年代にあり、すでにかなり層の厚いものになっていることがわかる。

台湾の演劇の力量については瀬戸宏氏から話を聞いたことがあるが、今度、飯塚氏は本格的に台湾演劇を研究することを表明された。曰く、「覚悟を決めて台湾の同時代演劇に向き合ってみよう」と。筆者は今後、飯塚氏の研究を道案内に台

湾演劇を楽しんでいきたいと思う。そのうち飯塚氏と台北のどこかで食事をしながら、氏の台湾演劇談義に耳を傾けていそうな気がする。

陳培豊「台湾研究の新しい風」は、2000年から2008年まで「民進党政権下の台湾で大きな変化を遂げた」台湾研究についてその功罪を振り返り、その上で「意外な変化や成長を見せ」るようになった「台湾研究の流れ」と「台湾研究の新しい風」について紹介している。近年の台湾研究の様子がよくわかって私には大変勉強になった。

「台湾研究の流れ」では、「最も多く新設された」台湾文学科について、近年では「新たな研究方法や姿勢」の上でそれぞれ特色があるとして、中興大学、清華大学、政治大学を例にその特色を挙げている。筆者はこれを読んで、なるほどそういう傾向なのかと一人で納得している。さらに、2005年に成功大学台湾文学科が主催した「跨領域的台湾文学研究學術研討会」は「事実上學術界に対して『台湾文学は領域横断(跨領域)の台湾研究機関である』と宣言した」ものであり、「このシンポジウムの成功は台湾研究の脱皮—伝統的な歴史学の手法に導かれた台湾史及び台湾研究から、新たな次元へと進化—を象徴している」と述べている。筆者はこのシンポに参加した一人だが、正直なところ、その意義を陳氏が述べているようには認識できていなかった。いま改めて蒙を啓かれた思いだ。

「台湾研究の新しい風」では、2008年に中央研究院台湾研究所で開催された『台湾史研究的回顧与展望』を取り上げている。ここで述べられているのは「新規の台湾文学」と「伝統的な台湾史研究」の方法論の差異、と同時に「台湾史研究の中にも浸透しつつある」横断領域の影響、そして次の点である。「台湾史研究は民進党執政後に急速且つ大量に大学内に進出したが、それに求められたものは当然ながら、体制内における學術の構築を通して台湾ナショナリズムのディスコースを強化し、本土政權の理論的基礎を確立することであった。だが皮肉なことに、新学科の設立によって、台湾研究の対象テーマはかえって以前ほど『政治』的ではなくな」った。「研究テーマの活性化、多元化によって、台湾庶民生活史、具体的には料理、食物、風呂、身体衛生、演歌、広告、日記、スポーツといった新しい研究テーマが次々と生み出されていった」と述べる。そして氏は、こうした傾向を冷静に且つ温かい目で見ているようだ。曰く、このような研究傾向は、将来「台湾ナショナリズムという台湾社会を反映する最も大きなエネルギーにかかわるテーマに回帰する可能性も秘めている」と。さらに最後に、中央

研究院の2008年「重要研究成果」論文に選出されたのが演歌をテーマとする研究であったことを受けて、「その答えには今しばらくの観察を必要とする」としながらも、「大衆娯楽を通じて台湾社会、政治問題を説くという方法は、横断領域の台湾研究の代表的な実例と言える。そして類同の研究の出現は、台湾研究が民進党執政下で知らず知らずのうちに芽生えた意外な収穫と言えるのではないか」と述べている。

一見なんでもありの研究状況に見えるが、主流文化以外の大衆文化やサブカルチャーへの研究視角は、ある意味では世界的な傾向でもある。台湾も一面ではこうした傾向の影響を受けているのであろう。台湾研究が、陳氏の観測の方向に展開することこそがさらに重層的な台湾史の構築につながるだろうし、そうあってほしいと願う。

以上の4編は、「新たな10年に向けて」、今後の台湾研究の発展の方向をどちらかと言うと明るく指し示している。ところが先述した呉豪人「かの時代の再臨という予感に悩まされて」は、そんな明るい台湾研究の中で一人、三種の神器（胃潰瘍、ニコチン中毒、不眠症）を載いて「闇黒時代の再臨に抗す」べく自らの「予感」と苦闘している。

呉氏は陳氏が参加した上記の『台湾史研究的回顧と展望』の第二セクションの「政治類」にコメンテーターとして参加し、「不眠症に罹ってしまった」という。一体何があったのか。詳細は呉氏の随筆を読んでいたきたいが、台湾研究はまだまだそれほど単純ではないことがわかる。筆者も例外なく、呉氏も羨むような「平然と『現実政治と一線を画す』と公言して憚らない研究オタク」、いな、純然たる学問をする日本人台湾研究者の一人（学問してるかは疑問だが）にすぎないが、呉氏の「…それでも台湾人の研究者らはよく頑張ったものです。がんばって、がんばって、がんばりまくって、ようやく脱政治宣言を申立てようとする時に、1987年以前に逆戻りになりかねない事態が生じた。われわれはまた再び否応なしに、政治力によって学問への精進を邪魔されるのだろうか」という言葉を聞いて神妙な気持ちになった。呉氏の予言する台湾研究の将来はやけに暗い。「2009年に入ると、台湾の状況はますますあやしくなりつつある」と言い、最後はノアの方舟の有名な箴言で結ばれている。

しかし、台湾はいまや世界に民主国家を標榜している。上原一慶先生が台湾の経済発展の「奇跡」は「公平を伴う急成長」であったと指摘しておられるし、安藤仁介先生は政権交代を「台湾に民主主義が根付きつつある事実の反映である」と捉え

ておられる。お二人とも呉氏の羨む日本人学者で、呉氏にはなんの慰めにもならないかもしれないが、筆者もそのように考えいましばらく台湾研究に関わっていきたい。—どうぞ「キャッカン、コウセイ、レイセイ」に好きなだけ取り組んでくださいとの呉氏の声が聞こえてくるような気がするが……。（2009/08/01 於陽明山）

溶解する研究領域—地域研究としての台湾経済分析はどこに向かうのか？— 川上桃子（アジア経済研究所）

ニュースレター第16号の特集『〇〇研究（者）から見た「台湾」「日本の台湾研究」』を、興味深く読んだ。この特集からは、政治・社会・文学・歴史といった様々な領域で、台湾研究が多くの困難を経て固有の領域として立ち上がり、他の地域を専門とする第一線の研究者の熱い視線を浴びるまでに発展を遂げてきたようすが伝わってきた。この紙面から立ちのぼる熱氣にふれて、私は羨ましさとともに、一抹の寂しさと疎外感を抱いた。私はこのところ、地域研究としての台湾経済分析という自分の立ち位置が急速に足場を失いつつあるような気がして、溶け出した氷河の上に身を置いているような心許なさを感じているからである。

台湾経済は、依然として豊かな水脈であり、その流れは今世紀に入りますますます勢いを増している。しかし、この激流がどのような力の支配のもとにあり、どこに向かっているかを知るうえで、地域研究というアプローチは限界に達しているのではなからうか？今必要なのは、この川をとりまく地形や歴史を細かく調べるのではなく、川の上に雨を降らす雲の発生メカニズム、川という生き物のライフサイクルの科学、流れのスピードや方向を司る力学の一般法則をより深く知ることなのではないか？

しかし、目の前を流れるこの豊かな川の流れの中に分け入っていくことをせず、データをとるために岸边から川に機械を差し入れたり取り出したりする作業はあまりに味気ない仕事だ・・・そんなことを考えては堂々巡りを繰り返している。

地域研究の立場からの台湾経済分析が大きな困難に直面していると感じる最大の理由は、なによりもその対象が「経済」という現象だからである。経済現象を分析する最強のツールは経済学であるが、これは——実際には欧米の経済システ

ムの骨組みを前提に理論が組み立てられている点で、特定の社会的文脈の上に構築された体系ではあるのだが——地域の固有性を扱うことにはほとんど何の関心も払わず、一般法則としての市場メカニズムや経済組織の行動原理の解明を追及してきた学問である。そのなかでは例外的に発展途上国の文脈をモデル作りに反映させようと試みてきた開発経済学でも、その努力は「後発性」という現象をいかにモデルのなかに盛り込むかに注がれてきたのであり、特定の社会の特色をつかみ取り、そのなかで営まれる経済行動を分析することには決して熱心ではない。経営学も、経済学に比べれば企業をとりまく社会の文脈や歴史的な経緯に関心を払う傾向にあるが、基本的には企業の組織や行動について普遍的なあり方を想定している。

経済、産業、企業のダイナミクスを理解するうえでの最もパワフルな分析ツールである経済学や経営学の視点が、地域の特質や社会の固有の文脈を捨象する傾向を強く持つ以上、「地域研究の立場からの経済研究」を志す者が困難に直面するのは当然のことである。とはいえ、このような経済学・経営学のあり方は今に始まったことではない。また、台湾に限らず、いかなる地域の経済を分析する者も共通して突き当たる問題である。

さらに、経済現象を分析するからといって、経済学や経営学にのみ枠組みを求める必要はない。実際、台湾で台湾経済の分析をリードしてきたのは、社会学者や政治経済学者たちであり、彼らの優れた仕事ぶりを見れば、私が感じているような困難を経済学のせいだけにするのは適当ではないだろう。

「地域研究としての台湾経済分析」を困難なものにしているより重要な要因は、ここ 10 年ほどのあいだに顕在化した台湾経済の構造の変化だろう。矢内原忠雄の『帝国主義下の台湾』から劉進慶や涂照彦の仕事にいたるまで、過去の優れた台湾経済の総合分析が扱ってきたのは、国家による強い支配のもとにおかれた経済体の分析であった。この問題設定のもとで、台湾という境界が持つ意味は、極めて明確なものであった。

しかし、1980 年代末以降の台湾経済の大幅な規制緩和と自由化は、国家という境界線が経済的に持つ意味を引き下げ、国家管理によって刻み込まれた台湾経済の特色をぬぐい取ることとなった。加えて、1990 年代以降の台湾企業の怒濤のような海外展開を経て、台湾という垣根が持つ経済的な意味はさらに低下した。確かに、労働市場や金融市場の分析、公営企業研究、産業政策の分析等、

台湾というくくりとその固有の文脈が重要な意味を持つトピックは、依然としてたくさんある。その一方で、グローバルな経済統合が進み、台湾の企業・産業発展の最もダイナミックな部分が台湾という地理的範囲を大きくはみ出して展開するようになるにつれて、台湾の経済発展のエッセンスをつかむためには、台湾の中で起きていることを知る以上に、グローバルな産業内分業の構造や米国・日本企業の戦略を知ることのほうが鍵になる、という局面が増えている。

このような台湾経済の発展とグローバル化の趨勢の一つの帰結として、台湾経済研究という「学術製品市場」で生じつつある変化もまた、地域研究からの台湾経済分析を標榜する者に大きな挑戦を投げかけている。

ここ 10 年ほど、中国語を話さず、台湾の歴史や政治・社会・経済について初歩的な知識しか持たない経済学者や経営学者が、台湾経済の実証分析に次々と参入し、優れた成果をあげている。その背景には、台湾経済がめざましい発展を遂げ、台湾企業が多くの産業で世界的なプレイヤーに成長したこと、台湾のマクロ・ミクロの統計データが充実しており分析材料に事欠かないこと、適当なパートナーさえ見つかれば台湾は概して企業・産業調査がしやすい環境であること、また日本人にとってはアクセスが良いこと、といった諸々の事情がある。データや事例の収集の場としての台湾の人氣が格段に上がっているのである。

私自身、経済発展論や産業分析のトップランナーが台湾に参入する際の水先案内人を務めたことが何度かある。台湾という沃野が、いわばデータとして切り取られ、消費されることに複雑な思いを抱いたこともあるが、彼らの研究が台湾経済に対する理解を格段に深め、新たな視野を切り開いてきたことを嬉しくありがたく思う。

そして、彼らが切れ味の鋭いツールや多くの国での調査から得た豊かな知識を武器に、的確な分析を次々と生み出すのを目にして私が思い知らされたのは、「生半可な事情通は、優れた目利きには到底かなわない」という当たり前の事実だ。私自身の生半可さと実力不足こそが最大の問題であるという点はこの際脇に置かせてもらうことにして、台湾を含む東アジアのめざましい経済成長への注目の高まりと、経済学・経営学の世界におけるミクロ・データを自ら収集して分析するアプローチの興隆とがあいまって、地域研究の立場から台湾経済分析を志す者の競争優位性は、現在かつてなく強い競争圧力にさらされていると思う。

それでは、地域研究としての台湾経済分析はどこに向かうべきなのか？ 溶け出しつつあるのに見えるその足場は、どのように再構築できるのか？ 私は、その答えはたとえ見つかるとしても、おそらく極めて折衷的なものになるだろう、と考えている。台湾の社会学者や政治経済学者が追求してきたような複数のディシプリンと掘り下げた事例研究の組み合わせは、台湾経済の文脈にこだわる者がめざすべき方向性を示唆しているだろう。また台湾経済の分析のためには、台湾を越えてより広い地域に目配りすることが必要になるだろう。経済学者・経営学者との協業もまた、「地域の固有の文脈」が経済的に持つ意味をあぶり出す作業を行ううえで不可欠であろう。

しかし、これらはあくまで技術論的な心がけに過ぎない。そして「地域研究としての台湾経済分析はどこに向かうべきか」という問いは、案外、突き詰めても答えようがないところにこそ問いかけの意味があるのかもしれない。普遍性と固有性の合間を行きつ戻りつすること——それこそが、特定の地域にこだわって経済という現象を分析する者が味わう楽しさの真髄であるようにも思われるからである。

日本台湾学会活動報告

日本台湾学会定例研究会 (歴史・政治・経済部会) 活動状況 担当理事 張士陽 (早稲田大学)

第48回(歴史・政治・経済部門)定例研究会
日時: 2009年7月27日(月) 18:00-20:00
場所: 東京大学本郷キャンパス東洋文化研究所3階大会議室(303)
報告者: 林正義(台湾・中央研究院欧米研究所研究員、東京大学東洋文化研究所客員研究員)
司会・討論: 松田康博(東京大学東洋文化研究所)
テーマ: 「政党輪替と台湾の対外関係変遷: 以兩岸及台美関係為中心的分析」
概要: 馬英九政権の下で、台湾の対外関係は大きく変化した。国民党は、中国を台湾経済活性化のチャンスととらえており、「一つの中国」の定義問題をあいまいに処理できる「92年コンセンサス」が有用だと考えている。また、安定した台米関係を背景に、中国の黙許を得る形で国際的な活動空

間を確保・拡大しようとしている。今後注目すべきは、再選に成功すると仮定して、馬英九が胡錦濤との間で和平協定締結に踏み切るかどうかであろう。武力行使の放棄には触れず、敵対状況の終結だけを宣言する協定の内容が民間で議論されている。馬英九の政権運営は手堅く、中国側の政策転換がないかぎり、今後も安定的な中台関係を維持することは可能である。報告と討論は全て中国語で行われ、10名の出席者が報告者と中身の濃い議論を展開した。なお本研究会は、東文研セミナーを兼ねて公開で行われた。(文責: 松田康博)

台北定例研究会 担当幹事 富田 哲 (台湾・淡江大学)

日本台湾学会第49回台北定例研究会
日時: 2009年7月11日(土) 15:00~18:00
場所: 淡江大学台北キャンパス
報告者: 藤本典嗣(福島大学共生システム理工学類)
テーマ: 民進党政権期における台湾の地域構造の変容—本社・支所立地の観点から
コメンテーター: 田畠真弓(東華大学社会発展学系)
※例会後に永康街にて懇親会を開催。
(台北定例研究会の参加記は学会ホームページでもご覧になれます。—編集)

学会運営関連報告 担当理事 佐藤幸人 (アジア経済研究所)

- I. 【第5期理事会常任理事会第7回会議議事録】
(抄)
日時 2009年4月11日(土)
場所 日本大学文理学部 本館1階B会議室
1. 理事長より、交流協会の後援助成を受けることになったため、笠原政治副理事長と共に交流協会を訪問し、お礼を述べてきたとの報告があった。
 2. 山口第11回大会実行委員長より、学術大会の準備状況について報告があった。
 3. 松金学会報編集委員長より、『日本台湾学会報』第11号の進捗状況の報告があった。また、新しく始めた独立した編集委員会の活動についても報告があった。
 4. 下村学会賞選考委員長、中島副委員長より、第5期学会賞の受賞論文(案)が出され、了承された。

5. 松田理事より、日本学術会議への登録を翌週申請することが報告された。
6. 佐藤総務担当理事より学術大会での記念講演／シンポジウムの企画体制が提案され、承認された。
7. 第6期理事選挙の選挙管理委員会の選挙の手続きに関する報告と提案を、佐藤総務担当理事が代理した。また、提案された「チェックリスト」を、今後の選挙で使用していくことが承認された。
8. 入会2件、退会1件が承認された

II. 【第5期理事会 理事会第3回会議 議事録】 (抄)

日時 2009年6月5日(金) 午後2:00～3:00

場所 日本大学文理学部本館2階第1会議室

1. 山口守第11回大会実行委員長より、新型インフルエンザの流行による大会の急な取消しの可能性は前日段階ではないことが報告された。
2. 各担当理事からの第5期の活動に関する報告の主要な点は以下の通り。
 - ・会員数473名(2009年6月5日現在)。
 - ・インフルエンザによる大会開催中止の可能性がある、連絡方法について検討したが、とりあえず不要になった。
 - ・学会費の納入状況は、2009年6月1日現在、納入者303名、納入率64%。昨年より4%増加。
 - ・ニュースレターを第16号まで発行した。第16号は担当の前田幹事の尽力により26頁の力作になった。
 - ・ホームページの「事務局からのお知らせ」ページで、映画上映の案内を始めた。
 - ・文献目録のデータベースには、2009年6月3日現在、8289件の登録。
 - ・昨年6～7月のアクセス数は、月間1万件以上。
 - ・学会報第11号を近々発行する予定。学会員の増加を鑑み、650部へと増刷。また、表紙を変更した。
3. 2008年度決算案について審議した。繰越金を36万円積み増すことになった。決算案を拍手で承認。
4. 春山理事長から第5期について、昨年の創立10周年において李遠哲氏を招請して講演を行ってもらったことが最も印象深い等、総括的な感想が述べられた。

III. 【第6期理事会 理事会第1回会議 議事録】 (抄)

日時 2009年6月5日(金) 午後3:00～4:00

場所 日本大学文理学部本館2階第1会議室

1. 春山明哲前理事長が第6期理事長として、拍手で承認された。
2. 理事長の指名により、笠原副理事長および常任理事が選任された。
3. 春山理事長より第6期に向けてのご挨拶があり、会員個々の研究の発展を図るとともに、成果の共有、発信を行う等の抱負が述べられた。
4. 第11回学術大会予算案が提案され、拍手にて承認された。
5. 2009年度予算案が提案され、拍手で承認した
6. 学会報の価格の改定が決定された。第8号はPDF化が終了しているので、価格を3000円から2000円に下げることになった。
7. 第6期第1回会員総会の議案について、修正後、承認された。
8. 公益法人化問題に関する報告があった。今後の取り組みについては、他学会と連携して情報収集をし、対応を検討したほうがよいという指摘があった。
9. 第12回学術大会の開催校は北海道大学で決定した。開催日は5月29日(土)。

IV. 【第11回大会総会議事録】(抄)

日時 2009年6月6日(土)

場所 日本大学文理学部図書館3階オーバル・ホール

司会：洪郁如(一橋大学)

議長：沼崎一郎(東北大学)

書記：上水流久彦(県立広島大学)

1. 菅原選挙管理委員長より、理事選挙の報告があった。1月20日付けで送付し、2月26日に関西大学で開票を行った。有効投票数は96票。
2. 6月5日、第6期第1回理事会が開かれ、春山理事が第6期の理事長に選出されたことが報告された。春山新理事長は、研究の発展、学会組織の強化、国際交流の拡大等に注力する等の挨拶を行った。
3. 佐藤総務担当理事より、現在、会員数が473名(一般362名、学生111名)であることが報告された。
4. 川上会計財務担当理事より、6月1日時点で2008年の会費納入者は303名で、納入率は64%であることが報告された。
5. 各業務担当理事および幹事より活動状況の報告があった。松金学会報編集委員長より、第11号は18本の応募があり、論説6本、研究ノートが1本、採択されたこと、昨年度のシンポジウムを特集として掲載したことが報告された。松田目録担当理事より、戦後の台湾に関する文献目録が現在8289本あり、月に平均6000件以上のアクセスが

あることが報告された。過去1年の各定例研究会は、関東が2回開催、台北が3回の開催だった。関西西部会は昨年12月6日に京都光華女子大学にて、1日かけて開催した。

6. 菅野監査より2008年度会計について、適正に処理されているとの監査報告がなされた。

7. 2008年度決算は原案のとおり承認された。

8. 2009年度予算は原案のとおり承認された。

9. 理事会より、植野会員の監査人新任が提案され、原案のとおり承認された。

10. 来年度の開催校である北海道大学所属の北村会員より、2010年5月29日(土)に開催する旨と、多数の参加の願いがあった。

11. 黄企画委員長より、多様な分野の方の報告を期待する旨、呼びかけがあった。

V. 第5回日本台湾学会賞選考委員会報告書

2009年6月6日

(一) 選考委員会の開催

第5回日本台湾学会賞選考委員会は下記の要領で開催された。

日時：2009年4月11日(土) 午後1:30-4:00

場所：日本大学 本館1階C会議室

出席者：下村作次郎(委員長／文化文学言語分野)

中島利郎(副委員長／文化文学言語分野)

小笠原欣幸(委員／政治経済分野)

大橋英夫(委員／政治経済分野)

松田吉郎(委員／歴史社会分野)

清水純(委員／歴史社会分野)

(二) 選考経過と結果

冒頭に、委員長より、日本台湾学会賞の趣旨と規定および過去4回の日本台湾学会賞の受賞状況について経過説明をおこない、その後選考に入った。

ついで、あらかじめ配布していた「学会賞理事推薦論文」を踏まえて各委員が選考対象論文について講評しながら、各分野について授賞候補作を推奨し、それらをめぐって意見交換・質疑応答を行った。

推奨された諸論文に対して順位づけを含めた論議をおこない、それを整理して、候補論文は最終的に三点に絞られた。その結果、審査委員会として、次の3編の論文を常任理事会に推薦することに決まった。

文化文学言語分野：和泉司「懸賞当選賞としての『パパイヤのある街』—『改造』懸賞創作と植民地〈文壇〉」(第10号)

政治経済分野：石川誠人「アメリカの許容下での『大陸反抗』の追求—国府の雲南省反攻拠点化計画の構想と挫折」(第10号)

歴史社会分野：石垣直「現代台湾の多文化主義と先住権の行方—〈原住民族〉による土地をめぐる権利回復運動の事例から」(第9号)

最後に、報告書、各分野の推薦理由作成の分担を決めた。

(三) 受賞理由

(1) 文化文学言語分野

日本統治期における台湾文学研究において、台湾人作家に関する作品論や作家論では、従来往々にして日本統治圧政下の台湾人の苦悩や差別に着目し、統治の矛盾やそれに対する抵抗に論及して日本統治批判に結びつけるという手法に終始しがちであった。しかし、和泉論文は、「内地」の著名雑誌の「懸賞」制度に着目し、その応募入選作・龍瑛宗「パパイヤのある街」の描写や構成の分析を通して、龍瑛宗がこの作品を懸賞に当選させるために、審査員を含む『改造』読者にいかに読まれるか、つまり中央文壇進出を最大限に考慮して書いたものであることを論証した。さらに、和泉論文はそのような意図で書かれたこの作品は、中央との不公平な関係へ切り込む意味を持っていること、また当選以後の台湾文壇における龍瑛宗の過酷な状況等の指摘を含め、日本統治期の台湾文学研究に従来とは異なる新たな視点と広がりをもたらした点できわめて斬新で、今後の台湾文学研究の可能性に大いに貢献したといえる。尚、今回学会賞にノミネートされた論文中、理事会においても最も推薦の集まった論文であったことを付記しておく。(中島利郎)

(2) 政治経済分野

アメリカと台湾で公開される外交文書を用いた政治外交史研究の進展は近年著しい。受賞論文は、雲南省反抗拠点化計画というこれまでほとんど日が当たらなかったテーマについて、米台の資料を広範に渉猟しその実態を深く掘り下げている。ビルマ側に越境した遊撃部隊を活用しようとする蒋介石政権、その動きを警戒しつつも完全にはやめさせないアイゼンハワー政権、中国とビルマの交渉、ラオスやタイの動き、ケネディ政権の東南アジア戦略といった当時の錯綜する国際政治の駆け引きが豊富な資料の読み込みの中から浮かび上がる。蒋介石の「大陸反抗」の内実、および、1950年代末から60年代初頭の米台関係を明らかにしたことにより高い評価を与えることができる。

なお、学会賞政治経済分野で外交史(米台関係)研究論文の受賞が今回を含めて3回連続となっていることに鑑み、外交資料を渉猟し「動かぬ証拠」を積み上げる研究手法は、優れた手法であり安定した評価を得やすいが、異なる研究手法を用いた

研究についても、それぞれの分野での達成度・貢献の度合いを見て、評価する必要があるということが委員の共通認識であった。(小笠原欣幸)

(3) 歴史社会分野

グローバル化に伴って世界各地に広まった多文化主義とは、国内に存在する諸集団の文化的多様性を認めつつ国民国家を統合しようとするイデオロギーである。その世界的潮流を受けて、台湾でも1980年代以降の民主化進展に伴って、族群各集団の多様性を認める政治的方向性が明確に示されるようになった。しかし、それによって台湾の各族群集団の権利承認の確固たる下地ができたと考えられるにはなお問題があることを、受賞論文はその考察を通して指摘している。本論文の主題は、台湾原住民族の「先住権」が多文化主義の中でどう扱われているか、という点にあり、なかでも、土地に対する権利に焦点が当てられる。著者は、原住民の土地に対する権利要求運動の経緯及び政府の政策や法制度などを分析し、原住民の権利保護がこれまで十分にはなされてこなかったことの原因が、実は多文化主義のイデオロギーと先住権保護の考え方との相克にあることを炙り出すことに成功している。しかも、従来の文化人類学の研究領域にとどまることなく、法律や政治分野における国際的な研究に丁寧に目配りすることによって、世界の少数民族の権利回復をめぐる議論の中に台湾原住民の事例を位置づけている点でも評価できるものであり、本学会賞受賞作品にふさわしいものと判断される。(清水純)

VI. 【第6期理事会常任理事会第1回会議事録】 (抄)

日時 2009年7月11日(土)

場所 東大駒場キャンパス18号館4階コラボレーションルーム3

1. 春山理事長より、第11回学術大会は新型インフルエンザの影響はあったが、盛況であったと総括された。
2. 第6期運営体制がほぼ整ったことが報告された。
3. 山口第11回学術大会実行委員長より、実行委員会の反省会における総括内容が報告された。主な点は次の通り。

シンポジウムを開催する場合は早めに立ち上げるべき。また、シンポジウムの場合、記念講演より多くの時間が必要であり、大会を1日半以上とすることを検討する必要がある。

企画委員会と大会実行委員会の職分を明確化するとともに、連携が必要である。

大会開催のマニュアルが必要であるという指摘があり、作成することになった。

大会のポスターがあるとよいという指摘があった。

4. 第12回大会に関して、現在の状況が報告された。
5. 交流協会からの提案を受け、同会からの助成のあり方について議論がおこなわれた。
6. 第12回学術大会分科会企画・自由論題報告の募集要項が検討された。
7. 『日本台湾学会報』第12号の投稿要項が検討された。
8. 持ち回り常任理事会規則が承認された。

◇「学会等参加記」や「台湾研究情報」への投稿をお待ちしております。どしどしお寄せください。
◇台湾研究や日本台湾学会へのご提言、あるいはニュースレターをお読みになったご感想を毎号掲載したいと考えています。ぜひご投稿ください。いわゆる若手の方、大学院生の方の積極的なご投稿を歓迎します。投稿要領は、担当までお問い合わせください。(前田直樹)

日本台湾学会ニュースレター 第17号

発行：日本台湾学会(代表 春山明哲)
発行年月：2009年10月

■日本台湾学会事務局

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1
東京大学教養学部18号館923 若林研究室気付
FAX: 03-5454-6416
E-mail: nihontaiwangakkai@ask.c.u-tokyo.ac.jp

■ニュースレター発行事務局

〒739-8525 広島県東広島市鏡山1-2-1
広島大学大学院社会科学部 前田研究室気付
FAX: 082-424-7246
E-mail: jats-newsletter@hiroshima-u.ac.jp